山口県の取組

1　研究主題について

山口県小学校教育研究会家庭部では、研究主題を「家族や家庭に積極的にかかわり、よりよい生活を創り出そうとする子どもの育成」として研究を進めている。

研究主題解明のためには、児童の家庭科学習に関する意識や家庭生活の実態把握をした上で家庭科教育の指導の手がかりを得ることが大切である。

そこで、山口県では毎年行われている家庭科の全国調査と同じ項目で、５、６年生の児童４００名を対象に実態調査を行い、その結果を参考にしながら研究を進めていくことにした。

2　実態調査から

①「あなたは家庭科の学習がすきですか。」という問いに対して、５年生では８０％の児童が「とてもすき・わりとすき」と答えているのに対し、６年生では６７％に減っている。

②「あなたは家庭科の学習がどのくらい分かりますか。」という問いでは、５年生と６年生を比べて「よく分かる・だいたい分かる」を合計した割合に大差はないが、「分からないことが多い・ほとんど分からない」については、５年生では２％だが、６年生では１０％に増えている。

③「家庭科の学習は生活で役に立つ（役立っている）と思いますか。」という問いに対しては、「とても役に立つ・わりに役に立つ」という児童が８１％から６年生では７６％に減っている。また、５年生では「あまり役に立たない・全く役に立たない」という児童が０％だが、６年生では１３％に増えている。

実態調査の結果から、５年生では学習に意欲的に取り組み、学習内容も分かり、家庭科が楽しい、役立つと感じている児童が多いが、６年生になると少しずつ「できないこと」や「分からないこと」が出てきて、意欲的に取り組めない児童や役立たないと感じる児童もいるということが分かった。様々な要因があり、一概には言えないが、たった２年の間に児童の家庭科に対する意識が大きく変化していると言える。

実態調査の結果は研究紀要に掲載している。他の設問でも山口県と全国では、同じような傾向が見られた。

3　研究仮説

山口県では５年生はもちろんのこと、６年生でも「よく分かる」、「楽しい」、「役に立つ」家庭科学習を目指し、『生活の中から課題を見付け、主体的な学習を展開し、学習内容の確かな定着を図れば、よりよい生活を創り出そうとする実践的な態度が育つであろう』ということを研究仮説として研究を進めてきた。

4　研究内容

研究内容は、①主体的な学習活動、②教材化、③指導と評価の３つにした。

①の主体的な学習についての具体的な取組は実践的・体験的な学習、問題解決的な学習、家庭や地域との連携、他教科との関連付けである。

②の教材化については、基礎・基本の明確化、教材や題材の工夫、題材構成の工夫、年間指導計画の作成である。

③の指導と評価では、基礎・基本の定着と指導の工夫、指導に生かす評価、評価方法の工夫である。

これらについて研究を進め、５年生にも６年生にも「よく分かる」、「楽しい」、「役に立つ」家庭科学習を目指した。

（1）よく分かる家庭科学習

「よく分かる」ということについて、研究紀要の１５ページの表で説明したい。この表は基礎・基本を明確にした食に関する題材配列である。題材名、学習指導要領の内容、学習活動をもとに、その学習で身に付けておかなければならない「基礎的・基本的な知識や技能」を明らかにし、表に位置付けた。この単元で扱う基礎的・基本的な知識や技能は何かということを教師が明確にもって授業を行うことでよく分かる家庭科の学習になると考えた。同じ調理をするという活動でも、前にどんな経験があるかということで扱うべき基礎的・基本的な知識や技能は異なる。例えば「家族とお茶を楽しもう」という学習では、児童にとって初めての経験であることから、ガスコンロの使い方や包丁、まな板の使い方等を基礎的・基本的な知識や技能としている。「簡単な調理」では、ガスコンロや包丁、まな板の使い方は既に学習しているので、「食事の必要性」や「調理に必要な道具」等を基礎的・基本的な知識や技能とした。もちろん、基礎的・基本的な知識や技能は、児童が主体的に身に付いた知識や技能を生かし、自分で考え、工夫する活動を繰り返す中で身に付くものである。「家族とお茶を楽しもう」という単元で、ガスコンロの使い方を学んだ児童は、次の「簡単な調理をしよう」でも調理をするために再びガスコンロを使うという繰り返しの中で、知識や技能の確実な定着が図れる。指導案集の１５ページは、今日の６年２組の授業「地球にやさしい！　かしこい衣服のＯＨ！せんたく」の評価規準表である。このように題材のねらいから評価規準を決め、それをもとに１時間毎の評価規準を定めている。このような一覧表にすることで、この時間は何を見取るのか、それがこの単元のどの観点につながっているかが一目で分かる。

また、１時間毎の評価規準をもとに児童を見取り、見取ったことを指導に生かしていくことでよく分かる家庭科の授業になる。

6年2組「地球にやさしい！ かしこい衣服のOH！せんたく」

（２）楽しい家庭科授業

「楽しい」ということについては、実践的・体験的な活動の繰り返しを位置付けることと問題解決的な題材構成にするという２点で述べたい。家庭科学習ではやってみることが大切である。実際にやってみること（実践的・体験的な活動）を繰り返す中で、「こうしたい。」「ああしたい。」という願いが生まれ、主体的に学習に取り組むことができるのではないだろうか。本日の５年２組の授業「わが家のベストを考えよう～整理・整とん～」では、快適な整理・整とんの仕方を考えてやってみる。すると、「最初はうまくいくけど、すぐめちゃくちゃになる、どうしたらいいかな。」という課題や問題点が出てくるので、改善点を出し合って話し合う。そして、またやってみて「わが家のベスト」を探っていくという実践的・体験的な活動の繰り返しを位置付けた題材構成になっている。

5年2組「わが家のベストを考えよう ～整理・整とん～」

また、５年１組の「みんなでつくろう、阿知須小オリジナルランチ」では、家族のためにオリジナルランチを作ろうという課題があり、児童は自分の家族のためにオリジナルランチを作るにはどうしたらいいかを考え、１回目の調理実習をしている。そのとき生まれた悩みや問題点、(本日の授業では、切り方、炒め方、味付けなどが課題であった）や家族からのアドバイスをもとに、本日もう一度調理実習を行い、家族のために作るという問題解決的な構成になっている。一人一人が課題を明確にもち、実践的・体験的な活動の繰り返しを位置付けた問題解決的な題材構成をすれば、児童が主体的に取り組むことができ、楽しい家庭科の授業になると考えている。

5年1組「みんなでつくろう 阿知須小オリジナルランチ」

（３）役立つ家庭科授業

「役立つ」ということについては、山口県では家庭との連携を図ることや他教科との関連を図ることで、児童が自分の生活の中から課題を見付け、学習したことを自分の生活に生かすことができ、役に立つと感じる家庭科学習になると考えた。「指導案集」の１０ページは、６年１組の今日の授業「くふうしよう！賢い買い方・使い方」の題材構想図である。楕円で示しているところは、家庭での取組を表している。このように家庭での取組を学習の中にきちんと位置付け、家族との連携が図れるようにしている。また、表右端には他教科との関連を示している。本題材では、社会科の「わたしたちの食生活と食料生産」等と関連を図り、学習を進めていくことを示している。

6年2組「くふうしよう！ かしこい買い方・使い方」

５　おわりに

以上、実態調査の結果と本日の授業をもとに「よく分かる」、「楽しい」、「役に立つ」家庭科授業の取組の一部を紹介した。詳しい研究内容は、研究紀要をご覧いただきたい。

以上のような研究を積み重ねることで、生活の中から課題を見付け、主体的な学習を展開し、学習内容の確かな定着が図られ、よりよい生活を創り出そうとする実践的な態度が、少しずつ身に付いてきているのではないかと感じている。

今後の課題を明らかにし、さらに研究を進めたい。